**典礼解説：待降節**

　**教会は毎年、待降節の典礼を行いながら、メシアへの待望を再現します。キリスト者は救い主の最初の来臨に向かう長期の準備に心を合わせながら、再臨への熱い待望を新たにするのです。
先駆者の誕生と殉教を祝うことで、教会は、「あのかたは栄え、わたしは衰えねばならない」（ヨハネ3･30）という洗礼者ヨハネの願望を自分のものとします。**

　**教会はとくに待降節と四旬節、わけても復活徹夜祭で、救いの歴史のすべての重大な出来事を典礼の「今日」という場に立って読み直し、追体験します。
しかし、それが実際に効果あるものとなるためには、教会の典礼が表現し体験させている救いの営みを「霊的に」理解できるように、カテケージスを通して信者を助けることが必要です。

「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」より**

　**39.待降節は二重の特質をもつ。それはまず、神の子の第一の来臨を追憶する降誕の祭典のための準備期間であり、また同時に、その追憶を通して、終末におけるキリストの第二の来臨の待望へと心を向ける期間でもある。この二つの理由から、待降節は愛と喜びに包まれた待望の時であることが明らかになってくる。

　40.　待降節は､11月30日、もしくは、それに近い主日の「前晩の祈り」に始まり、主の降誕の「前晩の祈り」の前に終了する。

　41.　12月17日から24日に至る週日は、いっそう直接に主の降誕の準備に向けられている。

『朗読聖書の緒言』より

　93　主日の福音朗読には次のような特徴がある。第１主日は時の終わりにおける主の来臨、第２主日と第３主日は洗礼者ヨハネ、第４主日は主の降誕の直前の準備となった出来事に関連している。旧約聖書の朗読は、救い主（メシア）とその時代に関する預言で、とくにイザヤ書からのものである。使徒書の朗読は、この季節の種々の特徴にそって告げ知らせ、勧め励ますものである。**　**94　 二つの朗読系列がある。一つは第１月曜日から12月16日まで、もう一つは17日から24日まで用いられる。待降節の初めの部分はイザヤ書の朗読で、同書の順番に従って行われる。その中には主日にも朗読される重要な箇所が入っていることもある。この期間の福音は第１朗読との関連で選ばれている。第２週の木曜日から洗礼者ヨハネについての福音朗読が始まる。しかし、第１朗読にはイザヤ書の続き、または福音と関連して選ばれた箇所が読まれる。主の降誕前の最後の週には、マタイ福音書の第１章とルカ福音書の第１章から主の降誕を直接準備する出来事が読まれる。第１朗読においては、旧約聖書の種々の書から福音と関連した箇所が選ばれており、その中にはいくつかの重要なメシア預言が含まれている。**

**典礼の特徴**

　**「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」39で述べられているように、待降節はキリストの二つの到来を待ち望む季節です。第一の到来は、降誕祭で記念する救い主の誕生です。待降節が進むにつれて、日々の典礼は主の降誕に向けた準備としての内容が増してきます。第二の到来は、終末のときのキリストの再臨です。年間最後の主日が「王であるキリスト」の主日であったように、待降節の直前にあたる「年間」の終わりの期間でキリストの再臨を記念してきました。待降節は、この主の再臨への待望の内容をそのまま受け継いで始まります。そのため、待降節の前半の典礼では、再臨への待望が主題となっています。**

**待降節中、典礼色は紫を用います。四旬節中に用いる紫が回心や悔い改めを表すのに対して、待降節の紫は、救い主の誕生への期待をこめて神に心を向け、静かに主の降誕を待ち望む心を表していると考えられます。なお、習慣のあるところでは待降節第3主日（ガウデーテの主日）にばら色の祭服を用いることができます。**

　**待降節の間、ミサでは栄光の賛歌（Gloria）は歌いません。栄光の賛歌は「天のいと高きところには神に栄光、地には善意の人に平和あれ」で始まります。この言葉は、羊飼いたちにイエスの誕生を告げる天使の賛美の言葉からとられています（ルカ2･14）。したがって、この言葉を唱えるに最もふさわしい日は主の降誕の祭日です。
そのため、主の降誕を準備する待降節中は栄光の賛歌を控え、主の降誕の祭日の夜半のミサのとき、大きな喜びと神への心からの賛美をこめて歌うのです。

　「ローマ・ミサ典礼書の総則（暫定版）」313には次のように述べられています。「待降節には、この季節の特徴にふさわしい節度をもって、オルガンと他の楽器を用いることができる。ただし、主の誕生の満ちあふれる喜びを先取りしないようにする」。待降節の早い時期から主の降誕の喜びを直接表すのではなく、救い主の誕生を待ち望む心を表すような演奏や楽曲が求められています。

　「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」42にあるように、待降節は12月17日を境にいっそう直接に主の降誕の準備に当てられます。ミサの聖書朗読は救い主の誕生が迫っていることを感じさせる内容となります。また、ミサの叙唱も、「主・キリストをすべての預言者は前もって語り、おとめマリアはいつくしみをこめて養い育て、洗礼者ヨハネはその到来を告げ知らせました。キリストはいま、その誕生の神秘を祝う喜びをお与えになり、わたしたちは絶えず目ざめて祈り、賛美しながら主を喜び迎えます」というように、キリストの誕生に直接結びつく出来事を述べるようになります。また、ミサで歌うアレルヤ唱のことばは、次に述べる「おお交唱」のことばになります。

　「教会の祈り」（聖務日課）の晩の祈りでは、福音の歌として「マリアの歌」（Magnificat）を歌います。この「マリアの歌」の初めと終わりには交唱（アンティフォナ）が歌われます。
待降節の後半にあたる12月17日から23日まで歌われる7つのアンティフォナは、伝統的に「おお交唱」と呼ばれています。その名の由来は、いずれの交唱も「おお（“O”）」という間投詞で始まるからです。それぞれの交唱のことばは、旧約聖書の預言書（とくにイザヤ書）や知恵文学などに基づく救い主への呼びかけです。そして、各交唱の結びは「来てください」と、救い主の到来を待ち望む嘆願になっています。**

　**17日**
**おお、すべてを越える神から出た英知よ。あなたは果てから果てまで、すべてを力強くやさしく整えられる。賢明の道を教えに来てください。**

**エッサイの株からひとつの芽が萌えいで
その根からひとつの若枝が育ち
その上に主の霊がとどまる。
知恵と識別の霊
思慮と勇気の霊
主を知り、畏れ敬う霊。
彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。（イザヤ11･1-3）
知恵は果てから果てまでその力を及ぼし、
慈しみ深くすべてをつかさどる。（知恵8･1）**

**18日**
**おお、イスラエルの指導者である主よ、あなたはやぶの火の中でモーセに現れ、シナイでおきてをお与えになった。力をふるい、わたしたちをあがないに来てください。**

**そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。（出エジプト3･2）主が、「わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。わたしは、彼らを教えるために、教えと戒めを記した石の板をあなたに授ける」とモーセに言われると…（出エジプト24･12）
弱い人のために正当な裁きを行い
この地の貧しい人を公平に弁護する。
その口の鞭をもって地を打ち
唇の勢いをもって逆らうものを死に至らせる。
正義をその腰の帯とし
真実をその身に帯びる。（イザヤ11･4-5）**

**19日**
**おお、民の旗印として立ったエッサイの切株、あなたによって諸国の王は鳴りをひそめ、民はあなたに願い求める。時を早め、わたしたちを救いに来てください。**

**エッサイの株からひとつの芽が萌えいで
その根からひとつの若枝が育ち
その上に主の霊がとどまる。（イザヤ11･1-2）
その日が来れば
エッサイの根は
すべての民の旗印として立てられ
国々はそれを求めて集う。
そのとどまるところは栄光に輝く。（イザヤ11･10）**

　**20日**
**おお、ダビデのかぎ、イスラエルの家の王しゃく、あなたが開けば閉じる者はなく、あなたが閉じれば開く者はない。とらわれ人のくさりをたち、やみと死の陰にすわる人を救い出しに来てください。**

**わたしは彼の肩に、ダビデの家の鍵を置く。彼が開けば、閉じる者はなく、彼が閉じれば、開く者はないであろう。（イザヤ22･22）
ダビデの王座とその王国に権威は増し
平和は絶えることがない。
王国は正義と恵みの業によって
今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。
万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。（イザヤ9･6）**

　**21日**
**おお、さしのぼる朝日、永遠の光の輝き、あなたは正義の太陽。日のあたらない陰に生き、やみにうもれている人を照らしに来てください。**

**闇の中を歩む民は、大いなる光を見
死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。（イザヤ9･1）
しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには
義の太陽が昇る。（マラキ3･20）**

**22日**
**おお、諸国民の待望の王、神と人とを一つに合わせる礎の石。あなたが土から造られた人を救いに来てください。**

**ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。
ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。
権威が彼の肩にある。
その名は、「驚くべき指導者、力ある神
永遠の父、平和の君」と唱えられる。（イザヤ9･5）
それゆえ、主なる神はこう言われる。
「わたしは一つの石をシオンに据える。
これは試みを経た石
固く据えられた礎の、貴い隅の石だ。」（イザヤ28･16）**

**23日**
**おお、インマヌエル、わたしたちとともにおられる王、立法者、諸国の民の希望、救い主、わたしたちを助けに来てください。**

**それゆえ、わたしの主が御自ら
あなたたちにしるしを与えられる。
見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み
その名をインマヌエルと呼ぶ。（イザヤ7･14）**

**この七つの交唱の冒頭をラテン語で表記すると以下のようになります。**

　**“O Sapientia”（英知）
　“O Adonai”（主）
　“O radix Iesse”（エッサイの切株）
　“O clavis David”（ダビデのかぎ）
　“O Oriens（朝日）
　“O Rex gentium”（諸国民の王）
　“O Emmanuel”（インマヌエル）**

**これらのラテン語の“O”の次にくる単語の頭文字を逆から並べると、“ERO CRAS”となります。これは「明日、わたしはいるだろう」という意味で、各交唱の結びの「来てください」という嘆願に応えることばとなっています。また、上述したようにこれらの七つの交唱は、ミサの中でも歌われます。「教会の祈り」の順番とは異なりますが、12月17日から24日までのミサのアレルヤ唱として、冒頭の「おお」を省いて歌われます。**